『鄭孝胥日記』に見る呉昌碩との交友

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1998-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松村, 茂樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1430

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

『鄭孝胥日記』に見る呉昌碩との交友

松村茂樹

はじめに

アヘン戦争後の開港以来、未曽有の経済発展を遂げていた近代の上海は、さまざまな人物を引き寄せていた。辛亥革命によって行き場を失い、書画の揮毫などで生計を立てようとするいわゆる清朝遺民の中にも、販路を求めて上海に赴く者が多かった。後に満州国総理となる鄭孝胥（一八六〇―一九三八）もそんな清朝遺民の一人である。

鄭孝胥はその高い学識によってすぐさま上海文墨界の中心的存在となり、その清剛なる書法は引く手あまたで、売字の年間収入は数千元[1]にのぼったという。そうなると、どうしてもある人物との接点が生じることになる。近代上海書画壇（海上派）の領袖・呉昌碩（一八四四―一九二七）である。当時、詩書画印四絶の名声をほしいままにしていた呉昌碩であるが、十六歳も年下の鄭孝胥と謙虚に交わり、詩集の序文や墓誌蓋まで書いてもらうなどしている。呉昌碩がいかに鄭孝胥を重んじていたかがわかろう。

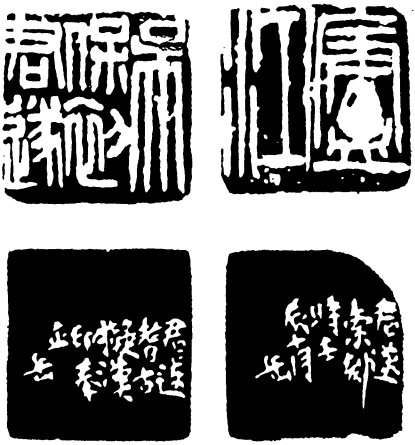
本稿はそんな鄭孝胥と呉昌碩の交友――という、近代中国文化人研究において重要かつ興味深いテーマを扱うものであるが、これが可能となったのは一九九三年十月に中華書局から、中国歴史博物館編・労祖徳整理『鄭孝胥日記』全五冊が刊行されたからである。該書はそれまで一般研究者が見ることのできなかった鄭孝胥の日記の現存分を整理して排印出版

したもので、資（史）料的価値が極めて高い。よって刊行直後から、該書を用いた論文がいくつか出ている。[2] 筆者も呉昌碩を研究する立場から、該書を部分的に参照して来たが、今回は、通観した上で鄭孝胥と呉昌碩の交友について注釈を加えつつ論じてみたい。このことにより、いささかなりともこれまでわからなかった点に照明をあてられれば――と思う。

一、詩と印を酷評

『鄭孝胥日記』に初めて呉昌碩の名が見えるのは一八九五年十一月十三日（日記は旧暦で記されているが、本稿では便宜上新暦に統一する）の次の一節である。

呉彦復が『呉昌碩印譜』および（呉昌碩が）著すところの『缶廬詩』を贈ってくれた。詩は浅俗、印はまだましだが、典雅を尽くしてはいない。



（図1） 呉昌碩刻「廬江」印（右）
「呉保初君遂」印（左）

当時、鄭孝胥は三十六歳、両江総督・張之洞の幕僚をしており、北京に出張中であった。

呉彦復（一八六九―一九一三）は廬江の人で、名を保初、号を君遂といい、彦復は字である。戊戌政変（一八九八）の際には新党に加担し、日本に亡命することになる人物。呉昌碩とはいつから交わっていたのかわからないが、すでに壬辰（一八九二）十月、呉昌碩は彼のために「廬江」印、「呉保初君遂」印（図1）を刻している。

呉彦復が鄭孝胥に贈った『呉昌碩印譜』とは具体的にどの印譜を言うのか不明（同名または類似名の印譜は存在するが、これより後に出され

ている)。当時存在した呉昌碩の印譜は、『削觚廬印存』のような少部数の自鈐本がほとんどで、いわゆる鋅版(俗称凸版)印泥押しという方法で大量に出まわっていたのは、一八八九年に呉隠が輯成した『缶廬印存』初集四冊(缶廬は呉昌碩の室号)のみである。また、『缶廬詩』は一八九三年に初版(図2)が出されている。

前述の通り、『鄭孝胥日記』に呉昌碩の名が見えるのはこの部分が最初であるが、『鄭孝胥日記』所収の日記中、一九八一年以前のものは一八八五年のものを除いては欠失があるし[3]、そもそもすべての事跡を日記に書くわけではなかろうから、鄭孝胥がこの時はじめて呉昌碩を知ったのか、それとも以前から知っていたのかは不明である。

ただ、鄭孝胥は呉昌碩の詩を「浅俗」と言い、印も「典雅を尽くしていない」と言っているのであるから、少なくともこの時点ではあまり良い印象を持っていなかったらしい。

二、呉昌碩の印も依頼する

ところが、八年後の一九〇三年、鄭孝胥は代理店を通して呉昌碩に刻印を依頼している。四月九日の条に次のような一節がある。

自ら印章を受け取りに九華堂紙店に行く。呉昌碩、于嘯仙にこれを刻せしめることにする。

また、四月二十三日の条に、

嘯仙刻するところの印章三顆を受け取り、『双綫記』を買って帰る。

とあり、五月二日の条に、

呉昌碩刻するところの印三顆を受け取って帰る。毎字一金であった。

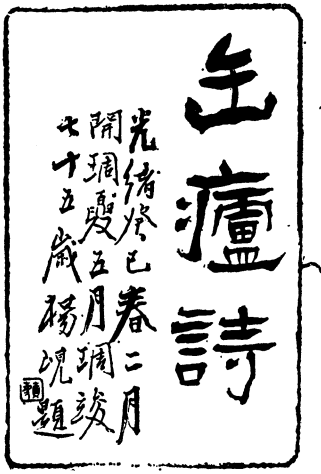
とあるので、鄭孝胥はまず四月九日に九華堂に注文していた印材六顆を受け取りに行き、その場で于嘯仙と呉昌碩に三

顆ずつ刻してもらうよう依頼し、四月二十三日に于嘯仙のものを、五月二日に呉昌碩のものを取りに九華堂に赴いたらしい。

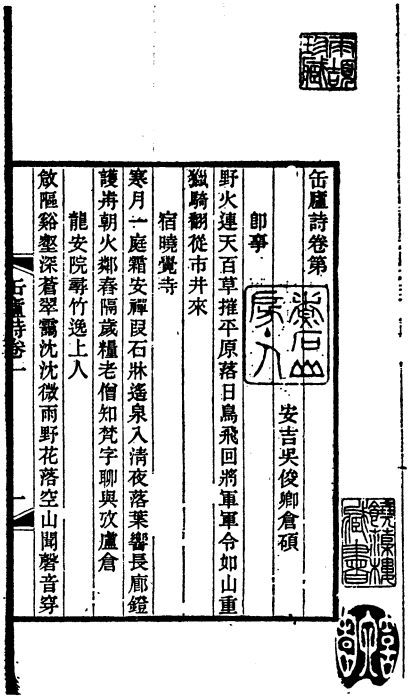
当時、鄭孝胥は四十四歳。上海にあった中国最初の官立軍事工場・江南機器制造総局の総弁をつとめていた。九華堂は当時上海河南路にあった老舗の文房品店。書画篆刻の依頼を仲介する代理店業務も行っていた。于嘯仙は于歔仙（生卒年未詳）のことと思われる。鐫刻をよくし、象牙の扇骨に顕微鏡で見なければわからないほどの字を三、四十行も刻むことができたという。要するに工人篆刻師であり、象牙などの印材に細緻な字刻を施すタイプと思われる。それに対して呉昌碩は文人篆刻家であり、石章に大胆な奏刀を行うタイプなので、于歔仙とは正反対の刻風ということになる。

（図2） 呉昌碩『缶廬詩』初版（大妻女子大学蔵）
①表紙

この時、呉昌碩は蘇州にいたが、その印はすでに上海で評判になっており、だからこそ老舗の九華堂も刻印依頼を仲介していたのである。だが、当時の鄭孝胥は呉昌碩と刻風が全く異なる于歔仙にも依頼しているわけで、呉昌碩をある程度評価しつつも、その印をメインで使おうとは思っていなかったことが窺える。



②封面



③巻首

三、呉昌碩の訪問をうける

それからまた七年後の一九一〇年一月二十九日、鄭孝胥は呉昌碩の訪問をうけている。同日の条を見よう。

諸貞壯、呉倉碩（倉碩は呉昌碩の別字）が海蔵楼に来るが、会えなかった。

当時、鄭孝胥は五十歳。官を辞し、上海南洋路に海蔵楼を築き、上海虹口寿椿里の借家から通う毎日を送っていた。ただ、この七日後には錦瑷鉄路督弁兼葫蘆島開埠事宜の任に就くため、大連行の船に乗っており、間もなく北京、天津、奉天の間を行き来する生活に入っている。

諸貞壯（一八七五、一作一八七四

諸貞壯吳倉碩見訪不遇

閉門祇有竹千竿題鳳人過晚日寒正恐時艱妨寂寞
時余將赴奉天欲論舊學苦衰殘缶廬書翰推三絶貞壯詩篇
感百端他日高樓須畫本二君合作試求看

（図3） 鄭孝胥「諸貞壯吳倉詩碩見訪不遇」

與貞壯同訪海藏樓不値

貞壯與我如駏蛩樓下躑躅游心胸何以仰此挾滄海
再欲得者癡蛟龍詩才展若野花繡墨瀋飲合邨醪鎔
主人忘歸且寄目落日搖蕩青芙蓉

（図4） 吳昌碩「与貞壯同訪海藏楼不値」詩

一九三二）は浙江紹興の人で、名を宗元、字を貞長といい、貞壯は別字である。革命文学団体・南社に加入したこともある詩人で、吳昌碩と一九一〇年、つまりこの年に蘇州で知り合い、極めて親しく交わった。

鄭孝胥はこの時のことを「諸貞壯吳倉碩見訪不遇（諸貞壯吳倉碩に訪ねられるも遇わず）」詩（『海藏楼詩』十三巻本巻七所収／図3）に詠み、この中で吳昌碩の書法をたたえており、吳昌碩も「与貞壯同訪海藏楼不値（貞壯と同に海藏楼を訪ねて値わず）（『缶廬詩』八巻本巻五所収／図4）を作り、鄭孝胥への尊敬を表明している。

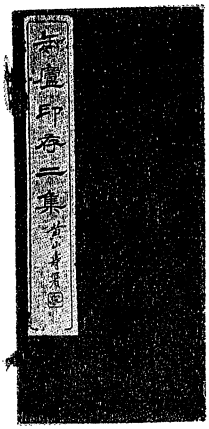
要するに、当時蘇州にいた吳昌碩が、上海に来た折に、友人の諸貞壯と共に鄭孝胥を海藏楼に表敬訪問したものの、会えなかった――というわけだ。

四、〝四絶〟を贈られる

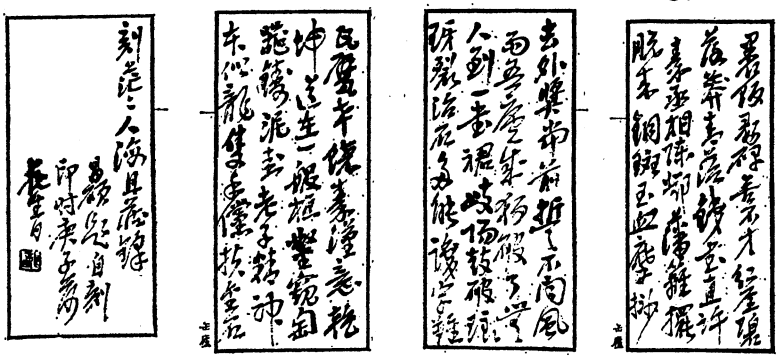
そして約半年後の一九一〇年八月九日、鄭孝胥はまた吳昌碩の訪問をうけている。

トロリーバスに乗って海藏楼に行く。吳倉碩およびその子の東邁がやって来て、私に「訪海藏楼」詩一首を贈り、更

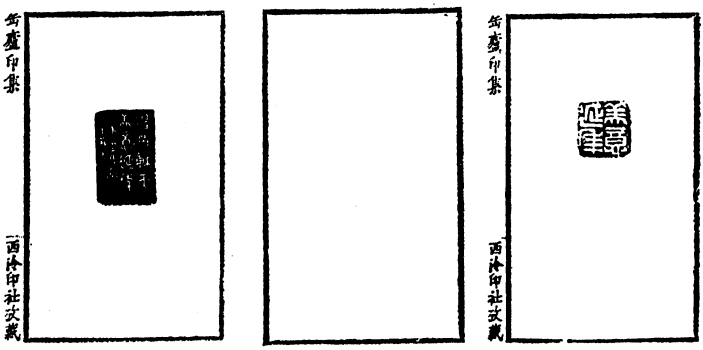
（図５）　『缶廬印存』二集
（『呉昌碩のすべて』1977・二玄社　より）



①帙



②呉昌碩自題



③巻首

に、「海蔵楼図」はすでに画き終えているので、諸貞壮を介してお贈りする——という。その新刻『缶廬印存』を見ると、みな諸子の名言が選ばれており、極めて喜ばしい。

当時、鄭孝胥は五十一歳。またも官を辞し、上海に戻っていた。

呉東邁（一八八六—一九六三）は呉昌碩の四男であるが、長男は十六歳で、三男は生後間もなく没しているので、次男の呉臧龕が長男格、そしてこの呉東邁が次男格であった。ただ、後、呉昌碩逝去の直前に呉臧龕が没したため、呉東邁は呉昌碩の跡目を継ぐことになる。

ここに見える「「訪海蔵楼」詩」は、前出の「与貞壮同訪海蔵楼不値」と同一の詩であろうと思われる。

また、「新刻『缶廬印存』」は、「みな諸子の名言が選ばれており」とあるので、『缶廬印存』一～四集のうち唯一、成語印を集めている呉隠輯成『缶廬印存』二集四冊（図5）のことであろう。これには庚子（一九〇〇）に書かれた呉昌碩の自題が付せられているのだが、題が書かれた時期と、刊行の時期は必ずしも一致しないので、いつ出版されたのかはわかっていない。ただ少なくとも鄭孝胥が見たこの日までには刊行されていたことがわかる。

呉昌碩は息子を連れ、うやうやしく鄭孝胥を訪ねているようだ。しかも「訪海蔵楼」詩の詩稿により詩と書を、諸貞壮に届けさせるという「海蔵楼図」により画を、そして『缶廬印存』により印を——と自らの〝四絶〟すべてを贈っているのであるから、鄭孝胥に対する尊重は最大限のものと言えよう。

鄭孝胥もまんざらではなかったらしく、『缶廬印存』をほめているようだが、「諸子の名言が選ばれて」いることをほめているだけで、その刻風については触れていない。

ちなみに「海蔵楼図」は、二十日後の八月二十八日、北京で諸貞壮から受け取ったことが記されており、更に一九一一年二月十日、琉璃廠（リウリーチャン）の英古斎に訪いて手巻に裱装するよう依頼している。

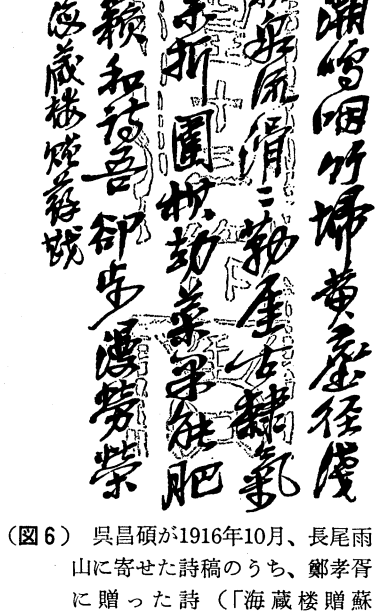
五、本格的交友の始まり

次に呉昌碩の名が見えるのは清朝滅亡後の一九一二年十二月七日である。

（長尾雨山を訪ねた後）、更に呉倉碩を訪ねるが、老女が出て来て「倉碩は杭州へ行っており、まだ帰っていない」と言う。おそらく夫人であろう。書いてもらうための冊頁と聯紙を小供に渡しておく。

当時、鄭孝胥は五十三歳。清朝が滅亡したため上海で鬱々とした日々を送っていたが、この頃には董事をつとめていた出版社・商務印書館に通うかたわら、上海在住の文人達との交友を再開していた。

長尾雨山（一八六四―一九四二）は讃岐の人で、名を甲、通称を槇太郎といい、雨山は号である。東京高等師範学校の教授をつとめていた漢学者であるが、いわゆる教科書疑獄事件にまきこまれ、無実の罪で東京高師を辞職、上海に渡って商務印書館につとめていた人物であり、当時は鄭孝胥の同僚であった。(4) また、呉昌碩とも親交を有し、呉昌碩が社長をつ



（図6） 呉昌碩が1916年10月、長尾雨山に寄せた詩稿のうち、鄭孝胥に贈った詩（「海蔵楼贈蘇戡」）を書いた部分。（長尾正和監修『缶廬詩翰』・1982・省心書房　より）

とめていた杭州の印学団体・西泠印社の名誉社員となっている。

呉昌碩はこの前年の一九一一年の夏に蘇州をひきはらい、上海に移住した。本格的に売字売画を行うためである。終の住居となる北山西路吉慶里に移るのは一九一三年になってからであるから、この時はまだ呉淞の借家に住んでいたはずで、鄭孝胥もこの借家を訪ねたのであろう。呉昌碩が杭州に赴いているのは、前述の西泠印社とのかかわりによってであると思われる。

さて、鄭孝胥は自ら呉昌碩を訪ねた上、用紙持参で書の揮毫を求めている。これは呉昌碩と積極的に交友しようという意志表示に他ならない。呉昌碩にとってこれは極めてうれしいことであったろう。早速、杭州から戻った後の一九一三年一月十二日、鄭孝胥を訪ねている。こうして鄭孝胥と呉昌碩の上海での本格的な交友が始まった。

六、誕生祝いに出席

これ以降、『鄭孝胥日記』には呉昌碩の名が多く見られるようになるのであるが、本稿では重要なトピックのみをピックアップすることにしたい。

一九一三年八月三十一日の条に次のような一節がある。

倉碩が八月初一日(旧暦、新暦では九月一日にあたる)は七十歳の誕生日ということで、私に詩を作ることを求める。

また、同年九月一日の条には、

呉倉碩の誕生祝いの詩を作る。(中略)夜、華慶園に行き、呉倉碩の誕生祝いの宴に出る。座客は数十人、劉聚卿、周湘舲、呉子修などと会う。

とある。

当時、鄭孝胥は五十四歳。政治的な活動もしていたようであるが、基本的には商務印書館に通いつつ、売字用の書の揮毫や文人達との交友の日々を送っている。

華慶園は上海公館馬路二二四号にあった徽州料理店。

劉聚卿（一八七五―一九三七、一作一九二六）は安徽貴地の人で、名は世珩、号は葱石、聚卿は字である。刊刻家、収蔵家として有名な人物。

周湘舲（一八六四―一九三三、一作一九三四）は浙江烏程の人で、名は慶雲、別号は夢坡、湘舲は号である。実業家、収蔵家として有名で、呉昌碩のパトロン的存在でもあった。

呉子修（一八四八―一九二四、一作一九二二）は浙江銭塘の人で、名は慶坻、別字は敬彊、子修は字である。進士。辛亥革命後、上海に退居した人物。

以上の三人が呉昌碩の誕生祝いの宴の主賓格であったのであろう。そしてもちろん鄭孝胥もそのうちの一人であったはずである。

七、商務印書館との顔つなぎの労をとる

一九一四年十月二十日の条に次のような一節がある。

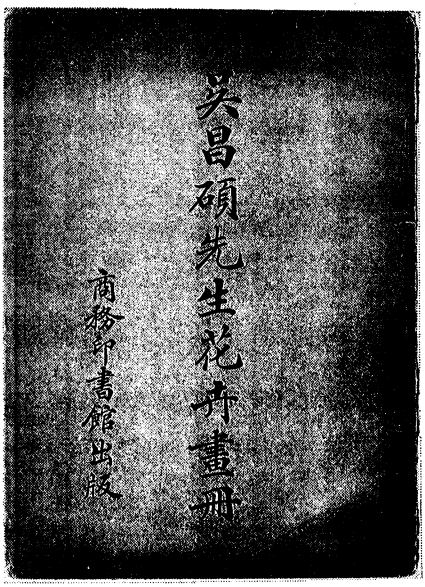
夜、呉倉石、諸貞壮、孟蘇孫、江伯訓、高夢旦、李拔可を悦賓楼にもてなす。

この前日、鄭孝胥は呉昌碩に招かれて上海北西蔵路一七六―七号にあった万家春という料理店に赴いている。よって、この悦賓楼でのもてなしは、いわゆる答礼宴会なのであろう。

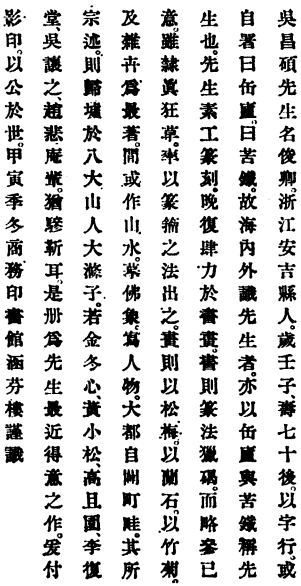
悦賓楼は上海湖北路即二八六至二八九号にあった北京料理店。前出の諸貞壮以外の人々を紹介しておく。

孟蕓孫（一八六八―一九三八）は江蘇武進の人で、名を森、字を蕓蓀といい、蕓孫とも署した。日本に留学し、一九〇

（図7） 商務印書館発行
『呉昌碩先生花卉画冊』
（伊藤隆夫氏提供）



① 表紙



呉昌碩先生名俊卿。浙江安吉縣人。歲壬子、壽七十後、以字行、或自署曰缶廬。曰苦鐵。故海内外識先生者、亦以缶廬與苦鐵稱先生也。先生素工篆刻。晚復肆力於書畫。書則篆法獨碼。而略參已意。雖隸眞狂草。率以篆籀之法出之。畫則以松梅。以蘭石。以竹刺。及雜卉爲最著。間或作山水。寫佛象。寫人物。大都自閑町畦。其所宗述。則歸墟於八大山人大滌子。若金冬心黃小松高且園季復堂吳讓之趙悲庵輩。猶膝斬耳。是冊爲先生最近得意之作。爰付影印。以公於世。甲寅季冬商務印書館涵芬樓謹識

② 序

③ 巻首

四年に帰国した後、当時広西辺防大臣であった鄭孝胥の幕に入り、商務印書館で『東方雑誌』の編集にもあたっていた。

江伯訓（一八六三―一九四四）は福建の人で、名を畬経といい、伯訓は字である。福建省内務司長をつとめ、商務印書館にも勤務した。

高夢旦（一八六九、一作一八七〇―一九三六）は福建長楽の人で、名を鳳謙といい、夢旦は字である。商務印書館の首脳の一人として活躍し、編訳所長、出版部長などを歴任した。

李拔可（一八八〇―一九五〇、一作一八七六―一九五三）は福建閩県の人。名は宣襲、拔可は字である。商務印書館の株主として経営に参加し、多年にわたって経理（取締役）をつとめた。

つまり、孟、江、高、李の四人は共に商務印書館の人物である。当時、鄭孝胥は五十五歳。前述の通り、商務印書館の董事をひきつづきつとめており、しかも株主でもあった。よって、この答礼宴会では呉昌碩とその友人である諸貞壮を商務印書館関係者と同席させ、いわゆる顔つなぎの労をとったと思われる。かくして一九一五年二月、呉昌碩は商務印書館から『呉昌碩先生花卉画冊』（図7）を出版しており、更に一九一八年、商務印書館の主要雑誌である『小説月報』の封面を描いている。

八、呉昌碩の展覧会を参観する

五日後の一九一四年十月二十五日、鄭孝胥は呉昌碩の展覧会に赴いている。

六三園に行く。日本人が呉倉碩のために書画会を開いており、数十幅が掛けられていて、自由に入って観ることができる。拔可、貞長、徐仲可、哈少甫などに会う。

六三園は上海江湾路にあった広大な日本料亭で、その主人・白石六三郎（一八六八―一九三四）は呉昌碩と極めて親し

かった。白石はこの時、六三園の翦淞楼という建物を提供し、呉昌碩のために個展を開いてあげていたのである。(5)

この中に見える抜可とは李抜可、貞長とは諸貞壮のこと。以下未述の二人を紹介しておく。

徐仲可（一八六九―一九二八）は浙江銭塘の人で、名を珂といい、仲可は字である。南社に参加し、商務印書館で『東方雑誌』の編輯にあたっていたこともある。掌故に博通し、その編になる『清朝野史大観』、『清稗類鈔』は現在も重んじられている。

哈少甫（一八七六―?）は南京の人で、名を麐といい、少甫は字である。書画篆刻にすぐれ、呉昌碩が名誉会長をつとめた海上題襟館金石書画会の会長など、各種団体の要職を歴任した。

（図8） 鄭孝胥書『沈氏研林』封面

九、『沈氏研林』と「海蔵楼」印

その後、『鄭孝胥日記』には呉昌碩がいっそう頻出し、訪問しあったり、宴会に招き招かれたりと、交友を深めている様子が窺える。そして一九一五年九月四日、鄭孝胥は呉昌碩を訪ねた際のことを次のように記している。

呉昌碩を訪ねる。話すうちに、その友人である沈公周石友所蔵『硯譜』二冊を示された。多く倉碩が銘を入れている。趙石という倉碩の弟子が、この銘を刻しており、すこぶる縦逸である。倉石（倉石も呉昌碩の別字の一つ）は石友のために私に隷書を求め、私のために「海蔵楼」印を刻

（図9） 鄭孝胥題『品研図』

し、石友拓『硯譜』四幅を贈ってくれた。私は十字の隷書長聯を書き、一つを石友に送り、一つを倉碩に贈った。

当時、鄭孝胥は五十六歳で、状況にほとんど変化はない。

まずこの中に見える人物の紹介をしておく。

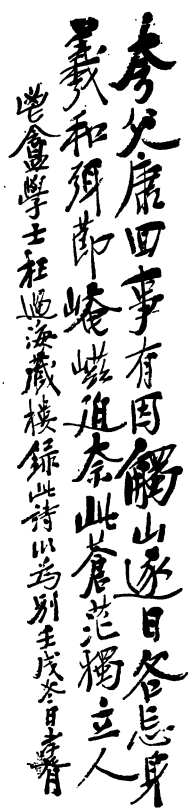
沈公周（一八五八―一九一七）は江蘇常熟の人で、名を汝瑾、号を石友といい、公周は字である。蔵硯家として有名で、その蔵硯譜『沈氏研林』中には友人の呉昌碩の銘が入った硯が多く見られる。

趙石（一八七四―一九三三）は江蘇常熟の人で、字を石農、号を古泥という。薬店の奉公人をしていたが、碑帖の臨書ばかりしていたために解雇され、これに同情した沈公周の紹介で呉昌碩の弟子となり、篆刻家として一家を成した人物。

つまり、ここで鄭孝胥のいう『硯譜』がすなわち『沈氏研林』である。ここには記されていないが、鄭孝胥は『沈氏研林』のために封面（図8）を書き、頭葉の「品硯図」（図9）を題している。ちなみに『沈氏研林』には鄭孝胥の封面の他に、呉昌碩の封面も付されているが、これは鄭孝胥の封面の後に置かれている。

また、この中に呉昌碩が鄭孝胥のために「海蔵楼」印を刻したことが記されているが、この印がいかなるものであるのかはわかっていない（というより指摘した人がいない）。ここに掲げたのは一九二三年一月、

（図11）「海蔵楼」印（（図10）を部分拡大）

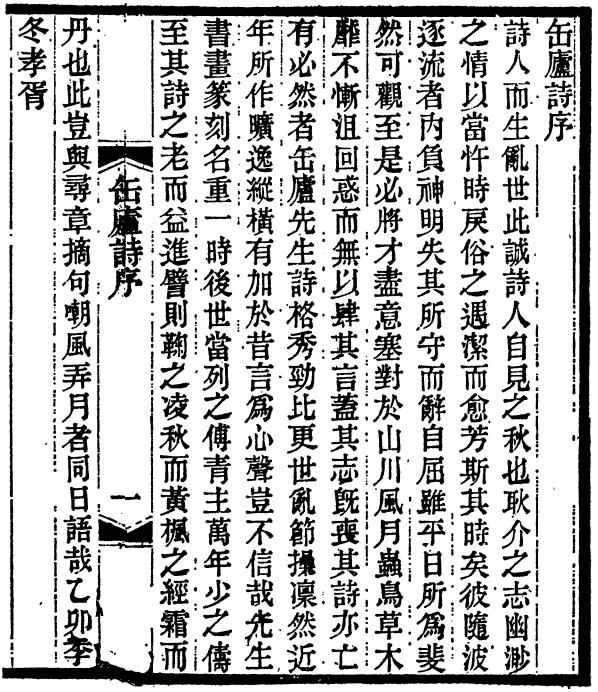


（図10）鄭孝胥書「題独立蒼茫図巻」詩軸

海蔵楼を訪れた日本の学者・神田喜一郎（一八九七―一九八四）に書き与えられた「題独立蒼茫図巻」詩軸[6]（図10）であるが、これに落款印として「海蔵楼」印（図11）が捺されている。もちろんこれがこの時呉昌碩が鄭孝胥のために刻した「海蔵楼」印であるという確証は何一つない。ただ、少なくとも刻風は呉昌碩のものであると筆者は見ているのであるがいかがであろう？

十、『缶廬詩』の序文を書く

その後も呉昌碩との往来は頻繁に行われ、一九一六年一月十二日の条には次のようなことが記されている。


缶廬詩序
詩人而生亂世此誠詩人自見之秋也耿介之志幽渺之情以當忤時戾俗之遇潔而愈芳斯其時矣彼隨波逐流者內負神明失其所守而辭自屈雖平日所爲斐然可觀至是必將才盡意塞對於山川風月蟲鳥草木離不慚沮回惑而無以肆其言蓋其志既喪其詩亦亡有必然者缶廬先生詩格秀勁比更世亂節操凜然近年所作曠逸縱橫有加於昔言爲心聲豈不信哉先生書畫篆刻名重一時後世當列之傳青主萬年少之儔至其詩之老而益進譬則鞠之凌秋而黃楓之經霜而
缶廬詩序　一
丹也此豈與尋章摘句嘲風弄月者同日語哉乙卯季冬孝胥

（図12）　鄭孝胥「缶廬詩序」

呉昌碩が来る。詩巻を携えており、私に序を作ることを求め、あわせて対聯を書くことを乞う。

また、翌日の一月十三日の条には、

呉昌碩のために「缶廬詩序」を作る。

とあり、更にそのまた翌日の一月十四日の条には、

「詩序」を昌碩に贈る。

とある。

当時、鄭孝胥は五十七歳、状況はほぼ同様である。この「缶廬詩序」（図12）は、後に刊刻家の劉承幹（一八八二―一九六三）によって刊行（劉承幹の序は庚申〈一九二〇〉七夕に書かれている）された『缶廬詩』八巻本に付せられている。

鄭孝胥はこの中で、「缶廬先生の詩格は秀勁で、世事を経験して節操を乱しているようなものに比べ、りりしくきっぱりとしている。近年の作はこだわりがなく思うがままな上に古人の言を加えて詩にしているというのもうなづける」と述べている。もちろん詩集の序文であるから諛辞も含まれていよう。ただ、ここではとりわけ「近年の作」をほめているわけで、呉昌碩の以前の詩を「浅俗」としていたことと矛盾はしていない。

十一、呉昌碩夫人の死を悼む

ひきつづき二人の往来は頻繁である。そして一九一七年七月十六日の条には次のようなことが記されている。

呉昌碩が夫人を亡くしたと聞き、出かけて行って弔いをする。昌碩は自ら、「妻と五十二年暮らし、今年で七十四歳です。男やもめの身では、あと何年生きられますやら！」と言う。

当時、鄭孝胥は五十八歳で、状況は変わらない。

呉昌碩夫人の施酒（一八四八―一九一七）は、この十三日前にあたる七月三日に亡くなっている。施酒は家事、育児の他に、印の代刻[7]までして呉昌碩を助けた賢夫人であった。

妻を亡くしてうちひしがれている呉昌碩の言葉をわざわざ日記にとどめていることからも、鄭孝胥の呉昌碩に対する深い同情が窺え、ひいては二人の交友がかなり深まっていることを感じせしめる。

鄭孝胥は同年八月七日、亡き呉昌碩夫人のために無地の緞子を買って贈り、八月十二日に上海フランス租界洋行街の湖州会館で行われた葬儀にも出席している。

十二、墓志蓋を書く

そして一九一八年九月二十日の条には次のようなことが記されている。

呉昌碩が来て、生壙志を書くよう求める。昌碩は今年七十五歳で、耳がわずかに遠くなり、足がわずかに不自由であるが、髪には白いものがない。

（図13）「安吉呉先生墓志銘」（「呉昌碩墓志銘」）拓本影印本（前出『呉昌碩のすべて』より）

また、八日後の九月二十八日の条には、

呉昌碩のために生壙志を書く。

とあり、そのまた二日後の九月三十日の条には、

呉昌碩を訪ね、壙志を渡す。

とある。

当時、鄭孝胥は五十九歳で、状況は変らない。

生壙志とは生前に作っておく墓志銘のことで、具体的に言うと、この時鄭孝胥は墓志銘にのせる墓志蓋を隷書で書いた（図13）のである。ちなみにこの墓志銘は、陳三立（一八五二、一作一八五三―一九三七）の撰文、朱孝臧（一八五七―一九三一、一作一九三二）の書丹、鄭孝胥の書蓋、周梅谷（生卒年未詳）の鐫字によって成っている。

墓志蓋の書者には、交友関係にあり、なおかつ高い地位にある人物を選ぶことが多い。呉昌碩はその書者に自ら鄭孝胥を選んだのである。このことは呉昌碩が鄭孝胥に信頼と尊敬を寄せていたことのこの上ない左証となるはずである。

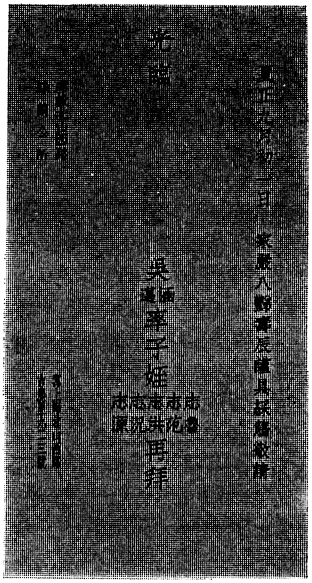
十三、八十の誕生日を祝う

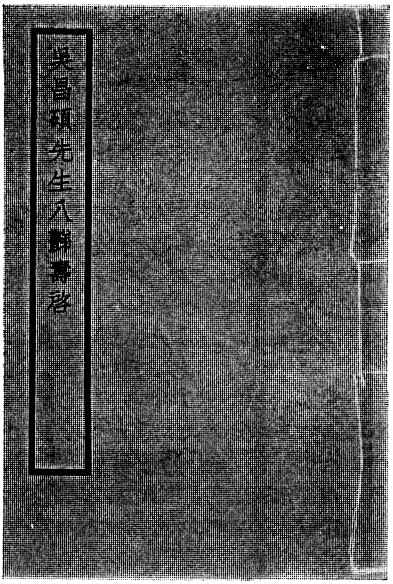
一九二三年、鄭孝胥は呉昌碩の八十歳を祝っている。十月十日の条に次のような記述がある。

絲繭公所に行く。呉倉碩八十歳の誕生祝いである。

当時、鄭孝胥は六十四歳。この年が上海定住最後の年となる。

絲繭公所は上海北山西路にあった製糸業関係者の会館。同じく北山西路に住んでいた呉昌碩の家の近所であったため、誕生祝いの会場として借りたのであろう。





吳昌碩先生八帙壽啓

今歲之秋九月初一日安吉

吳昌碩先生壽八十介景祝延一時爲盛況在某等託於交游應共稱觴惟聞　先生夙誡家人屏除俗例然以文字爲壽酒食相娛禮有攸宜誼難從缺用爲通啓期無後時至先生生平行誼洎學術之所爲海內外推重者宗元前草先生小傳略著於篇附綴左方以供審覽

況周頤　劉錦藻　葉銘　楊泰頤
胡湘林　姚煜　熊飛　邱炳鎔
鄭孝胥　趙從壽　朱鳳池　莫永貞
陳三立　胡惟德　王震　姚景瀛
馮煦　金永　周慶雲　商言志　同啓
吳慶坻　沈瑞麟　蔣汝藻　高時顯
朱祖謀　丁乃揚　劉文玠　丁仁
龐元濟　諸宗元　阮性山　施采
孫德謙　沈鏞　哈麟　王立三

（図14）　「吳昌碩先生八帙寿啓」（「吳昌碩八十歳誕生会招待状」）

鄭孝胥はこの会場に行ったとしか記していないが、この誕生会の紹待状（図14）が残っており、『生誕百五十年記念・呉昌碩作品集』（一九九四・篆社書法篆刻研究会、日本篆刻家協会）に収められている。これによると、鄭孝胥はこの誕生会の発起人に名を列ねていたことがわかる。

十四、〝御覧〟の栄誉を記す

鄭孝胥が呉昌碩と最後に会ったのはいつのことなのか、『鄭孝胥日記』には明記されていない。ただ、鄭孝胥は一九二四年一月六日、退位後も紫禁城内に留まっていた溥儀の師傅となるべく、北京に向けて上海を発っており、その十六日前にあたる一九二三年十二月二十一日、呉昌碩を訪ねている。同日の条を見よう。

呉昌碩を訪ねると、詩巻を出して私に示した。とりたてて老いさらばえた様子はなく、階段の登り降りもすこぶるうまくてすばやい。八十の老翁も、自ら悦に入っていた。

鄭孝胥の呉昌碩に対する温かいまなざしが窺える。また、日記には記されていないものの、この頃、呉昌碩晩年の自選詩集『缶廬集』[8]の題簽（図15）も書いている。

その後、『鄭孝胥日記』には、呉昌碩に会ったという記述は見あたらない。ただ、鄭孝胥は溥儀に仕えるようになってからも、何回か上海に戻っており、一九二五年四月三十日の条には、

扇二枚に画き、その一つを呉倉碩に与える。

（図15） 鄭孝胥書『缶廬集』四巻本題簽

とあって、呉昌碩の名が見えているものの、会っていたのかどうかはわからない。

そして一九二六年八月二十一日の条に、

行在に行き、進講する。陛下は新聞を読んでおられ、鄭孝胥、呉俊卿（俊卿は呉昌碩の名）が作った「歳寒図」を見つけられると、筆を取って試みに松を描くよう命じられた。

という一節が見える。ここで言う「行在」とは、当時溥儀が避難していた天津日本祖界内の張園である。いかに退位した皇帝とは言え、溥儀は鄭孝胥にとって唯一無二の主君であり、自らの画がその主君の〝御覧〟に供されることはこの上ない名誉である。そしてその名誉は呉昌碩にも与えられたわけで、鄭孝胥はうやうやしく、呉昌碩の名を諱（本名）で記し（主君には字や号で対応してはならない）、記念としたのであろう。

十五、上海時代を懐かしむ

一九二七年十一月二十九日、呉昌碩は上海で八十四年の生涯を終えた。鄭孝胥はこの六日前の十一月二十三日まで上海に戻っていたが、同日、船で青島に向けて発っており、呉昌碩逝去の日はいつものように天津の行在で進講をしている。だから鄭孝胥は呉昌碩の逝去をすぐ知り得る場所にはいなかったわけである。

ただ、鄭孝胥はその後もたびたび上海に戻っているし、天津にいたとしても呉昌碩の逝去は伝わっていたはずであるにもかかわらず、『鄭孝胥日記』には呉昌碩の逝去については記されていない。その理由はわからないが、当時の鄭孝胥は満州国建国に向けて動いていたわけで、もはや呉昌碩との文人としての交友に思いを致すようなことは二の次三の次になっていたのかもしれない。

ところが呉昌碩が逝去してから十年目の一九三七年一月三日の条に呉昌碩の名が見えている。

五馬路に行き、呉昌碩が画いた「海蔵楼図」をさがし出す。

五馬路とは新京（長春）の東五馬路という地点で、鄭孝胥が一九三六年十二月二十七日まで本宅としていた屋敷のことである。この時にはすでに新京柳条路三百一号に新築した邸宅に移っているのであるが、おそらくはまだ五馬路に家財を残しており、時おりやって来ては家財あらためをしていたのであろう。

また同年四月十七日の条には、

五馬路に行き、（中略）朱古微の父の墓表一通を見つける。陳三立の撰、沈曾植の書、呉俊卿の篆額になる。

朱古微とは、前出の呉昌碩生壙志を書丹した朱孝臧の別字。陳三立も呉昌碩生壙志の撰文をしていたことは前述の通り。沈曾植（一八五〇―一九二二）は鄭孝胥の古くからの友人で、呉昌碩とも親しかった。

長春で最晩年を迎えていた鄭孝胥にとって、呉昌碩をはじめとするこれら上海時代の旧友達の手になる作はどのような感慨をもよおしめるものだったのであろうか？

『鄭孝胥日記』に呉昌碩の名が見えるのはこれが最後となる。そしてそれから一年弱の一九三八年三月二十八日、鄭孝胥は長春で病死する。

おわりに

以上、『鄭孝胥日記』を通観しつつ、鄭孝胥と呉昌碩の交友について述べて来たわけであるが、二人の交友の特徴をまとめるなら次の二点になると筆者は思う。

① 立場的には鄭孝胥が常に呉昌碩の上にある。

② 二人の直接交友は上海においてのみ行われている。

①は鄭孝胥が進士にこそなっていないものの、解元（科挙の地方試験である郷試の首席合格者）出身のエリート官吏であったのに対し、呉昌碩は秀才（科挙の初期試験に合格して県学などに入ることを許された者）にすぎなかったからであろう。こういった点から、二人の意識は清朝崩壊後も封建時代のままであったことがわかる。

②は呉昌碩が一九一一年に上海に移居して以来、ほとんど動くことがなかったので、当然と言えば当然のことなのであるが、筆者がここで言いたいのは、当時の上海が、いわば清朝遺民の隠棲の場の役割もはたしており、政治的にもまさしく遺民（遺臣）であった鄭孝胥のような人物も、政治的にはほとんど清朝にコミットしていなかった呉昌碩のような人物も、共にのみこんでいた場であったということなのである。つまり、こういった場である上海なくしては、二人は出会うことがなかったわけで、近代の上海が二人の交友を可能ならしめた。さすれば、必然的に、二人は上海以外の場では交友をすることがなかった――ということになる。もとより、上海以外の場においては、鄭孝胥は遺民ではなく、生々しい政治家になっており、呉昌碩のことなど忘れている。鄭孝胥が呉昌碩と交友できるのは、彼が上海で〝遺民モード〟に入っている時に限られるのである（最晩年もこのモードに入りたがっていたようであるが…）。

近代の象徴的都市であった上海が、旧意識の持主であった二人を出会わせ、交友させた。二人の交友の細部を確認すると共に、この交友を上海という都市の機能を証明するための材料に資することも本稿の目的の一つであった。

（注）

（1）陳貞寿「鄭孝胥」（朱信泉、厳如平主編『民国人物伝』第四巻・一九八四・中華書局　所収）に、「嘗鬻字自給、歳入数千元」とある。

（2）たとえば、樽本照雄「鄭孝胥日記に見る長尾雨山と商務印書館」(1)〜(5)（『清末小説から』三五〈一九九四・一〇・一〉〜三九〈一九九五・一〇・一〉・清末小説研究会　所収）、平野和彦「鄭孝胥と康有為」（『群馬女子短期大学紀要』第二二号・一九九五・群馬女子短期大学　所収）などがある。

（3）『鄭孝胥日記』「整理説明」参照。

（4）樽本照雄『清末小説閑談』（一九八三・法律文化社）所収論文、および同「長尾雨山は冤罪である」（『大阪経大論集』第四十七巻第二号・一九九六・大阪経大学会　所収）参照。

（5）松村茂樹「呉昌碩と白石六三郎――近代日中文化交流の一側面――」（『大妻女子大学紀要――文系――』第二九号・一九九七・大妻女子大学　所収）参照。

（6）『書道全集』第二四巻「清Ⅱ」（一九六一初版・平凡社）所収。

（7）呉昌碩入室の弟子・王个簃（一八九六―一九八八）に師事された上海美術館副館長・丁羲元氏の御教示による。

（8）『缶廬集』について、呉昌碩の孫・呉長鄴氏（呉昌碩の四男・呉東邁の長男）は、「呉昌碩先生年譜」（呉長鄴著・河内利治、北川博邦訳『わが祖父呉昌碩』・一九九〇・東方書店　所収）の中で、「三子邁（呉東邁のこと――呉昌碩の三男・呉楚は生後間もなく没しているため呉東邁を「三子」としている）が先生の晩年に作った詩篇を持って先生生前の至交である朱彊村・馮君木に整理を請いて一巻とし、先生手編の四巻とともに五巻となし、題して「缶廬集」として刊行し、朱彊村が題耑し、譚復堂・沈寐叟等が序を作った」と記しており、これが宣和印社五巻本である。だが、呉長鄴氏の言う「先生手編の四巻」は五巻本より前に『缶廬集』四巻本として刊行されていたらしく、この影印本が一九八四年七月、台湾の文海出版社から発行されており、呉昌碩の孫・呉瑤華氏（呉昌碩の次男・呉臧龕の次男）が跋文を書いている。鄭孝胥の『缶廬集』題簽は、この四巻本のために書かれているので、「四巻」とあるが、宣和印社版五巻本では、この「四巻」二字が消されている（附図参照）。

宣和印社版『缶廬集』
五巻本題簽